

令和6年度 国語（書写）部会研究計画

1 研究主題

言葉を大切にし、自律的に学ぶ子供の育成

2 研究主題について

教育振興基本計画¹⁾において述べられているように、2040年以降の社会を見据えた教育政策におけるコンセプトとして「持続可能な社会の創り手の育成」及び「日本社会に根差したウェルビーイングの向上」が掲げられた。今後、めざすべき社会及び個人の在り様として重要な概念であり、これらの相互循環的な実現に向けた取組が求められている。

このような教育振興基本計画で示された教育の実現のためには、他者と円滑にコミュニケーションをとり、協働して課題発見・解決していく力を高めることが必須である。また、自らの学びの状況を把握しつつ、主体的・協働的に自己調整しながら課題を解決していく、自律的に学ぶ力が必要である。本会では子供のもつ言葉の力を高めるとともに、子供が自己調整しながら課題を解決していく力を身に付けることが不可欠であると考えた。

以上のことから、研究主題を「言葉を大切にし、自律的に学ぶ子供の育成²⁾」とし、国語部会と書写部会の長年にわたる、これまでの研究の蓄積を生かしながら研究を進めていくこととする。

（1）「言葉を大切にする」子供とは

国語科においては、「言葉を大切にする子供」を「言葉による見方・考え方を働かせる子供」であると捉える。子供は、自らの課題を探求していく過程において、「なぜこの言葉が使われているのか」「自分の思いを表すための的確な言葉はどれか」など、改めて言葉に着目して、思考力・判断力等を活用しながら吟味することを通して自覚的・能動的に言葉を用いることができるようになる。

その中でも書写としては、「言葉を大切にする子供」を、「文字を大切にする子供」と捉える。文字を大切にすることは、書写学習を通して、文字感覚を高め合い、確かな書写力を身に付けることであり、相手意識や目的意識をもって自己表現することであると捉える。文字は日常生活に不可欠で、各教科の学習活動の基盤となり、言語活動の充実のために存在するものである。文字を大切にすることは、生涯にわたり、文字文化の豊かさを楽しみ、継承・発展させる態度を育成することにつながる。

（2）「自律的に学ぶ」子供とは

本研究が育成をめざす「自律的に学ぶ子供」は、自らの学習の状況を把握しつつ、主体的・協働的に学習を自己調整しながら課題を解決していく過程において、学習指導要領に示された資質・能力を調和的に備えていく子供である。そのような子供を育成するためには、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善やカリキュラム・マネジメントの確立、指導と評価の一体化を図ることが特に重要である。その際には、多様な子供たちを誰一人取り残すことなく育成する「『個別最適な学び』³⁾と子供たちの多様な個性を最大限に生かす『協働的な学び』⁴⁾」の観点から学習活動の充実を図ることに留意したい。

3 研究の内容と方法

(1) 国語

研究主題の実現に向けて、「言葉による見方・考え方を働かせ、考えを形成し、共有する単元の構想と展開」⁵を軸として研究を進めていく。

① 「考えを形成する」過程における指導の工夫

考えを形成する過程において、子供一人一人が自らの課題に対して既存の言語に関する知識や経験を想起し、相手や目的、場に応じて、言葉や学び方を選んだり、結び付けたりしながら考えることができるように指導を工夫する必要がある。

ア 問いをつくるための指導の工夫

教師は、子供が自らの言語生活と深く結び付き、継続的に探究していく意欲をもつことができるような問いをつくるための指導を工夫したい。そのためには、子供の興味・関心や必要感を育て、生活に根差した問いが生まれるようにする必要がある。言葉による見方・考え方を働かせながら粘り強く探究し続けて、自分の考えを広げたり深めたりすることができる問いの開発に努めたい。

イ 一人一人の学びの姿に即して学習を手引きすること

教師は、子供が自らの学びに応じて学習の手引きを選びながら活用していくことができるよう、個々の学びの姿に即して学習を手引きする必要がある。子供が自分の思いや考えを見付け出したり整理したりすることができるように、具体的な言葉で観点や例を示すことなどの工夫が考えられる。

ウ 言語活動を、探究の過程に位置付けること

教師は、子供が自分の考えの深まりを実感できる言語活動を、探究していく過程に位置付ける必要がある。特に、「書きながら考える」「考えながら書く」などの思考を伴う書く活動によって、その時々自分の考えが広がったり深まったりしたことを自覚できるようにしたい。

② 「考えを共有する」過程における指導の工夫

「考えを共有する」過程においては、子供一人一人が必然性のある活動として共有する目的を自覚していることが前提となる。そのため、「考えを共有する」過程を通して、自分の学びの成果と課題を明らかにしたり、新たな考えを形成したりして自己調整することができるように指導を工夫する必要がある。

ア 必然性のある「考えを共有する」場面の設定

教師は、学習活動において、必然性のある「共有する」場面を設定する必要がある。子供が自ずと共有するポイントを絞ったり、自他の考えを比較・検討したり、結び付けたりすることができるように手引きしたい。

イ 観点の明確化

「考えを共有する」場面において、教師は、子供が対話するべき相手が誰（何）か、明確化されるよう留意する必要がある。子供の考えの深化・拡充を促すために、どの段階で、誰の、どの考えとどのように結び付けるのが最適か、手立てを講じたい。

ウ ICT利活用の工夫

「考えを共有する」手段として、ICTの利活用は欠かせない。自分の考えを他者と共有したり、他者の考えを自分の考えと比べたりすることにおいて、ICTを適切に活用することにより、有機的にしかも合理的に「考えを共有する」ことが可能となる。

③ 単元の構想と展開における評価の工夫

教師は、目の前の子供の姿をもとに自らの指導を見直し、改善しながら実際の授業に臨んでいく。そこで、「指導と評価の一体化」を進めるためにも、「考えの形成と共有」を螺旋的に繰り返していく過程で、子供一人一人が学びの軌跡を振り返り、自己の学びを自覚することができるよう留意したい。そのためにも、これまでにも取り組んできた「学習の記録」⁶を効果的に活用したい。

④ 国語科におけるカリキュラム・マネジメント^{*7}に関する研究

国語科において育成をめざす資質・能力を体系的に把握するとともに、子供や学校の実態と重ね合わせながら年間あるいは6年間を見通した年間指導・評価計画に位置付ける必要がある。先の単元で習得した言語能力が後の単元で活用されたり、同じ言語活動を螺旋的に繰り返されながら発展していったりする、つまり活用しつつ習得することによって、資質・能力が育成される。習得と活用の組み合わせを考える際には、それぞれの言語活動の特性を見据え、関連付けた計画が必要となる。

年間指導・評価計画を作成する際には、資質・能力の育成を図る上でも、教科等横断的な視点に立ち、他教科等との関連を一層考慮したい。

「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善の実現に向けては、前述の評価の工夫による学習指導過程の改善とカリキュラム・マネジメントの両輪が不可欠である。単元や授業においては、その時々での学習の状況を子供の姿等からの確に評価し、学びの過程の再構成、指導・支援の工夫・改善などを行うことにより、子供一人一人の学びを深めていきたい。

⑤ 言語能力育成のための日常的な取組

ア 語彙指導の充実^{*8}

語彙は、全ての教科等における資質・能力の育成や学習の基盤となる言語能力を支える重要な要素である。「言葉による見方・考え方」を働かせ、考えを形成し、共有する過程を充実させるためにも、思考を深めたり活性化させたりしていくことができるように語彙を豊かにすることが求められる。

イ 読書生活の充実^{*9}

読書は、多くの語彙や表現を通して様々な世界に触れ、自分事として体験したり知識を獲得したりしながら、新たなものの見方や考え方に出会うことを可能にする。

ウ 「作文読本」の活用^{*10}

「作文読本」を活用することは書く習慣を身に付けるとともに、考えを形成することにもつながる。思考を伴う書く活動は、思考力の育成に大変有効である。

(2) 書写

① 自律的な学び（主体的・対話的で深い学び）につながる授業改善

書写における、「自律的な学び」とは、子供が自ら課題をもち（主体的に）、考えを出し合ったりよりよい見方や考え方を認め合ったりしながら（対話的に）課題を解決するとともに、自らの学習を振り返り、次時の学習につなげて学び続ける態度（深い学び）のことである。

日々の書写学習が、生涯にわたって文字を書く喜びにつながり、文字を書くことに主体的に関われるよう導いていきたい。そのためにも、書写学習における授業改善を重ね、質の高い深い学びが実現できるよう支援していきたい。

主体的な学び ^{*11}	対話的な学び ^{*12}	深い学び ^{*13}
<ul style="list-style-type: none"> ○ 書写学習に興味や関心をもって取り組んでいるか。 ○ 見通しをもって、課題に対して粘り強く取り組んでいるか。 ○ 自らの学習活動を振り返って、次時の学習や日常生活につなげようとしているか。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 子供同士の対話に加え、他者との対話を通じて、自らの考えを広げ深めているか。 ○ あらかじめ個人で考えたことを意見交換することで、新たな考え方に気付いたり自分の考えをより適切なものに変えたりしているか。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 書写学習で習得した原理・原則や考え方を活用し、問いを見出して解決しようとしているか。 ○ 対話的な学びによって得られた自他の変容に気付き、それを他者に伝えたり受け止めたりしているか。 ○ 学んだことを他の学習や日常生活の中に相互に関連付け、生かそうとしているか。

② 学びの進め方

子供が書写学習の進め方を理解できるよう、主体的な学習活動を弾力的に展開する。また、教師自身も、子供と共に学びながら、自己を高めていく。

過程	学習活動	教師の指導・支援
① つかむ (課題把握)	基準（文字を書く時の原理・原則）を理解し、自分の課題をつかむ。	ア 子供一人一人がめあてをつかみやすいように工夫する。 ・興味や関心をもつ導入になるよう、教材や提示の方法を工夫する。 ・試し書きや日常に書いた文字の中から、課題を見つけられるように工夫する。 ・基準を明確にする。 イ 短時間でめあてをつかませ、書く時間を確保する。
② 高める (課題追求)	学び合いを通して、創意工夫をしながら自分の課題を解決するように努める。	ア 子供の課題や実態に応じた支援をする。 イ 学習課題に応じた効果的な教材教具や ICT 機器を有効に活用する。 ・分解文字 ・水書用紙 ・水書用筆 ・書画カメラ ・デジタル教材 ・タブレット ・練習用紙（教師作成、児童作成） ウ 学習形態を工夫する。 ・ペアやグループ学習などの対話的な学習活動を取り入れ、自分の考えを広げ深めることができるようにする。 ・個に応じた学習課題や習熟度を考慮に入れた学び合いのグループ作りをする。
③ 確かめる (評価)	課題に沿った自己評価、相互評価をする。	ア 評価基準を明確にする。 イ 学習の成果だけでなく、学習過程を大切に、個に応じた支援を工夫することによって、学習の意欲がさらに高まるように配慮する。 ウ 自分の課題に沿った自己評価ができるような学習カードや評価カードの工夫をする。 エ 友達のよいところを認め、励まし合う相互評価ができるようにする。
④ 生かす (発展)	学んだことを他の学習や日常生活に生かす。	ア 本時で学習したことが、関連した他の文字に生かせるようにする。 イ 次時の活動につながる意欲付けをする。 ウ 日常生活の中で、文字を書く喜びを見つけられるようにする。

③ 個に応じた支援

ア 支援の必要な子供に対する指導の工夫

(TT、UD を取り入れた提示と活用、ICT 機器の活用 等)

イ 利き手に応じた指導の工夫

(見やすい教材文字の位置・ワークシートの工夫、用紙の置き方 等)

④ 文字に関する知識・理解と興味・関心

ア 用具・用材の知識、使い方

イ 漢字・仮名等に関する知識・理解

ウ 日本の文字文化に対する興味・関心

エ 文字に親しむ環境づくり

⑤ 日 常 化

ア カリキュラムマネジメントの工夫

- ・ 書写学習と他教科等との関わりについての研究
(記録、日記、手紙、報告、詩、物語、短歌、俳句 等)
- ・ 社会に開かれた教育課程の工夫
(ポスター、手紙、色紙、礼状、うちわ、横断幕、灯籠 等)

イ 硬筆と毛筆の関連を考えた単元や教材の選び方

ウ 目的や場面に応じた総合的な書写力

(筆記具の選択、書く速さ、縦書きや横書きの様式への対応 等)

○日常化において

現在、学校教育の中ではICT機器の活用が進むに伴い、手で文字を書く機会が減りつつある。文化庁が行っている「国語に関する世論調査」(平成27年9月)によると、9割を超える人が、「手書きの習慣を大切にすべき」と答えており、10～30代を中心に手書き習慣のよさが見直されてきている。また、令和3年度の調査(令和4年1月調査)によると、情報機器の普及で受けると思う影響について、約9割の人が「手で字を書くことが減る」「漢字を手で正確に書く力が衰える」と答えており、改めて書写学習の必要性を感じる結果となっている。さらに、各教科等の具体的な改善の方向性を議論する「国語ワーキンググループ」(平成28年8月)でも、国語科「書写」について、漢字や仮名の由来など文字文化に対する理解を深める学習の重要性や、視覚、触覚、運動感覚など様々な感覚が複合する形で言葉を学習していく「手書き」の大切さを議論している。

手書き文字^{*1}には、ICT機器類等の情報端末による文字にはないよさがある。それは筆記用具さえあれば、いつでもどこでも書くことができるという便利さであり、メモを取る等の速書きのよさである。何より、気持ちをこめ、丁寧に書いた文字にはぬくもりがあり、文字を書き進める過程で書き手の個性や思いが表れるよさである。手書きすることは、単に情報を伝達するだけでなく、相手を意識したコミュニケーションの場であり、自己表現の場である。文字を大切にするという考え方が基盤となり、文字を大切にすることを通して人や物を大切にすることにもつながる。このような意識をもって、書写で培われた力が生活の様々な場面で発揮されるよう配慮したい。

*1 令和5年6月16日に閣議決定された教育振興計画は第4期(2023年～2027年)にあたり、2つのコンセプト・5つの基本的な方針・16の教育政策の目標からなる。

*2 本研究は、自らの学習課題を設定し、その解決に向けて思考・判断・表現を重ねるとともに、学習の記録等をもとに、学習の節目で自己の取組を振り返りつつ、修正や変更を加えていくことができる子供の育成をめざした「単元学習の理念を生かした指導」に関する研究と軌を一にするものである。

平成28年度国語部会研究計画では、これまでの研究を踏まえ以下のように単元学習の理念の要素をまとめた。

- ①単元を通した指導目標と子供の活動目標が明確に設定されていること
- ②身に付けるべき言語能力を適正に育成することができる
- ③子供の主体性を重視していること
- ④学習の自覚化を図っていること
- ⑤展開の過程に、他と関わり合う交流の場が位置付けられていること
- ⑥子供の発達に応じ、教育課程全体を見通し言語活動が位置付けられていること

*3 「個別最適な学び」については、「指導の個性化」と「学習の個性化」に整理されており、児童生徒が自己調整しながら学習を進めていくことができるよう指導することの重要性が指摘されている。（『個別最適な学び』と『協働的な学び』の一体的な充実」文科省）

○全ての子供に基礎的・基本的な知識・技能を確実に習得させ、思考力・判断力・表現力等や、自ら学習を調整しながら粘り強く学習に取り組む態度等を育成するためには、教師が支援の必要な子供により重点的な指導を行うことなどで効果的な指導を実現することや、子供一人一人の特性や学習進度、学習到達度等に応じ、指導方法・教材や学習時間等の柔軟な提供・設定を行うことなどの「指導の個別化」が必要である。

○基礎的・基本的な知識・技能等や、言語能力、情報活用能力、問題発見・解決能力等の学習の基盤となる資質・能力等を土台として、幼児期からの様々な場を通じての体験活動から得た子供の興味・関心・キャリア形成の方向性等に応じ、探究において課題の設定、情報の収集、整理・分析、まとめ・表現を行う等、教師が子供一人一人に応じた学習活動や学習課題に取り組む機会を提供することで、子供自身が学習が最適となるよう調整する「学習の個性化」も必要である。

*4 「協働的な学び」については、令和3年答申教育課程部会において次のように記載されている。（『個別最適な学び』と『協働的な学び』の一体的な充実」文科省）

○探究的な学習や体験活動などを通じ、子供同士で、あるいは地域の方々をはじめ多様な他者と協働しながら、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、様々な社会的な変化を乗り越え、持続可能な社会の創り手となることができるよう、必要な資質・能力を育成する「協働的な学び」を充実することも重要である。

*5 「『個別最適な学び』と『協働的な学び』」の一体的な充実」を国語として探求していくこと具体が「言葉による見方・考え方を働かせ、考えを形成し、共有する単元の構想と展開」である。研究主題の解明に向けて、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善や指導と評価の一体化を進め、カリキュラム・マネジメントの観点から迫っていききたい。

○「言葉による見方・考え方」については、学習指導要領に示されているとおりである。「子供が言葉による・見方考え方を働かせる」ために教師は、一人一人に応じて、どの言葉に着目して、どのように考えるかを幅広く捉え、さらに豊かな見方・考え方へと導くこと（「指導の個性化」）が必要となる。また、一人一人が、自分の思いや考えに応じて、言葉による見方・考え方を選んで働かせることができるようにすること（「学習の個性化」）が、考えを形成したり、共有したりする際の土台となる。

○「考えを形成する」ことについて、本研究では、課題の解決に向けて「なぜ自分はそう考えたのか」等、自己と対話し、繰り返し自己に問い続けながら考えを明確にしていくことと捉える。「考えを形成する」過程において、教師は、学習材（文章・登場人物・作者など）や他者、自己との対話を必然性のあるものにするるとともに、対話の内容を焦点化していく必要がある。また、一人一人に応じて、対話を通して考えを形成し、共有したいという意欲を高めていくことが重要である。

○「共有する」ことについて、本研究では、自己の考えを表現し、互いの考えを認め合ったり、比較して違いに気付いたりすることを通して、考えを広げたり深めたりしていくことと捉える。

*6 「学習の記録」は、学習の手引きや成果物、振り返り、音声データや映像などのICT機器によって蓄積されたものなどがある。「学習の記録」は、子供一人一人が学びを自己調整することや、自身の考えの変容や成長、課題などに気付くこと、次の学びに対する意欲を高めることに有効である。また、自己の学びを振り返り、自覚することができるようになる。教師は、それらの記録から、一人一人の学びの姿や考えの変容、意識の流れ、学びの意味や可能性を捉えるなどして、価値付けていくことにより、「指導と評価の一体化」を進めていくことも考えられる。

*7 「『社会に開かれた教育課程』の理念の実現に向けて、学校教育に関わる様々な取り組みを、教育課程を中心に据えながら、組織的かつ計画的に実施し、教育活動の質の向上につなげていくこと」（「カリキュラム・マネジメント」文科省）と示されている。また、3つの側面として「教師が連携し、複数の教科等の連携を図りながら授業をつくる」「学校教育の効果を常に検証して改善する」「地域と連携し、よりよい学校教育をめざす」があげられている。

*8 語彙指導をする際には、教師は、学習指導要領に示されている各学年の語彙指導の重点を踏まえつつ、学習や日常生活の機会を捉えて意識的に言葉を投げかけたり取り上げたりしながら、適切な使い方ができるよう指導していくことが大切である。また、辞書や事典を利用して必要な語句等を調べる習慣を身に付けさせたい。

*9 子供の豊かな読書生活をつくるためには、日常的に読書に親しむ態度を養う指導に留まらず、その一人一人の発達に応じて、情報を収集したり、考えを形成したりする際に役立つ読書へと系統的に高めていく必要がある。また、授業においては、子供が目的に応じて図書を選んだり、目的に応じた読み方（精読・速読等）を選択したりするなどの指導を工夫したい。

*10 多数の読み手を有する「作文の広場」に作品を投稿する体験は、書くことへの強い意欲付けとなる。「練習」の例文や「作文の広場」に掲載された同学年の作文はねらいに沿った学習のモデルとなり、書く技能の向上のために活用

することができる。他者の作文を読むことを通して、自分の作文を見つめ直す視点を得たり、作文を書く際の手がかりにしたりする活用方法もまた効果的である。

*11 「主体的な学び」とは、文字を書くことに興味・関心をもち、毎時間見通しをもって粘り強く課題に取り組むとともに、自らの学習を振り返り、次時の学習につなげる学びのことであると考え。つまり今、学習していることが自分にとってどのような意味をもつか、何をめざしているのかなど、課題を自分のものとして捉え、意欲的に課題に取り組めるよう支援することが大切である。また、学習活動を振り返り、「できるようになった」「分かった」という自覚をもつことにより、学習に対する意欲がさらに高まる。

*12 「対話的な学び」とは、子供同士の協働、教職員や地域の人たちとの対話を通して、自ら習得した技法や考え方をより広げたり深めたりすることであると考え。自らの思いや考えを他者と伝え合うことで、新たな考え方に気付いたり、自分の考えをより適切なものに変えたりすることができる。このように、他者との対話を通して、互いの考えをすり合わせ、自己の視野を広げ問題解決を図る場面を、単元全体や授業の中に明確に位置付け、計画的、系統的、継続的に展開していく。

*13 「深い学び」とは、子供が学習過程の中で、書写学習における「見方・考え方」を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、問いを見出して解決しようとしたり、思いや考えをもとに創造したりすることに向かう学びであると考え。対話的な学びによって得られた自他の変容に気づき、それを他者に伝えたり受け止めたりしながら、他の学習や日常生活の中に相互に関連付け、生かしていくことが大切である。なお、書写における「見方・考え方」とは、「文字を書くことを、文字の原理・原則に着目して捉え、理解したり伝えたりしながら表現し、文字への自覚を高めることである」と考える。

*14 手書き文字とは、手以外の体の部分を使って書く場合も含む。